明治翻訳語のおもしろさ

福田　眞人

Keyword:明治時代、翻訳、訳語、外国語の導入、新語造語、文化解釈

1 はじめに

飛鳥・奈良・平安時代から江戸時代まで、日本は主に中国・朝鮮の文化圏にあった。

それを漢字文化圏と言ってもいいものかもしれない。

隣国の中国と朝鮮からの文化の輸入と理解が、学問の大切な存在理由だった（現代でも、西洋の学問を翻訳、解釈することが重要な学者も少なくない。つまり外国語能力という問題がある。外国と外国語に弱かった日本。しかし、経済発展に伴って、またある種の世界をリードするような分野では、日本語の論文が世界で読まれていた。機械工学の世界が例外的にそれに当たる。新幹線車軸の設計者であった教授は、10年で折れるような設計をした。安全係数の問題等）。仏教もその文化輸入の波にのって日本にもたらされた。確かに、文化交流の過程で、外国語が新しい意味を持った語彙を日本にもたらしたことだけは間違いない。それが明治維新後いきなり爆発的に日本に入ってきたのだが、それだけではなく、すでに飛鳥時代、平安時代、中国の隋、唐から、さらには明などから流入し続けていたのである。

すでに『万葉集』（成立時期未詳、7 世紀後半から 8 世紀後半に編まれ 759 年以降成立、大伴家持編纂？、4500 首和歌）を編むような歌詠み（和歌）の伝統があったが、それが漢字を借用することで表記されるようになった。漢字の恩恵があったのである。（医学の分野では、後漢の時代に書かれた張仲景『傷漢論』が江戸時代まで、あるいは明治初期の漢方医学まで影響の残る支配的医学書であった。）

和語と漢語の混合が起こり、それが唐風と国風を生み、ますます日本語は豊富な語彙を獲得していったのである。たとえば、倭寇が果たした役割は、海賊的略奪だけではなく、実地での文化交流であったろう。それは日明貿易が果たした役割にも匹敵するようなものだったのである。言語的な中国の影響は厖大なものであったことが分かる。

2 中国語以外の流入:葡萄牙語、阿蘭陀語

すでに 1506 年には、中国に西洋経由の梅毒が伝わっていた。それが日本に上陸するのは永正九年(1512)のことであった。それは、種子島に最初のポルトガル人が鉄砲を伝えた天文 12 年(1543)よりはるか以前のことであった。種子島にポルトガル人が来て、鉄砲を伝えたことよりもはるかに重要だったのは、それまで日本が知っていた朝鮮、中国、天竺(インド)の向こう側に、さらにもっと別の世界があることが分かったことだった。

将軍足利義輝(永禄 3 年、1560 年)ならびに織田信長がキリスト教(耶蘇教)の布教を認めたことは、ポルトガル語が日本語に入ることを意味した。さらに南蛮交易が認められたことは、新しい物がその名前と共に日本に到来することを意味した。

続いて、耶蘇教の禁止(慶長 18 年、1613 年)とオランダ船だけが、平戸、長崎に寄港してよいことになった(元和 4 年、1618 年)。そこを通して世界の情報が細々ながら流入していたことは重要である。

阿蘭陀語(蘭、オランダ)語、葡萄牙(葡、ポルトガル)語などなどが入ってきた歴史的経緯はさておき、当初、語彙の直接的翻訳という作業はあまりなかった。むしろ、意味が半ばしか分からなくとも、それを原語のまま用いたのである。物質の名称が多く移入され、なお精神性の重んじられた宗教でさえ、固有名詞、名詞はそのまま用いるということが少なくなかった。

輸入され使用された語彙には次のようなものが見られる。

[ポルトガル語]

カルタ、カステラ(カステイラ)、ランビキ(化学器具)、デウス、

carta(L. charta), castella(L. castellum, castle), alambique, Deus(L.deus)

クルス(十字架)cruz(L. crux), フラスコ(frasco, E. flask), パン(pao. L. panis)

パードレ(バテレン)padre. L. pater 神父の意味が、転じて切支丹

悪魔の訳語に困って、日本的邪悪な存在としての「天狗」としたのが興味深い。

[オランダ語]
アルコール(alocohol, L. alchohol), ズック(doek), ランプ(lamp, L. lampada, Lampas), ランドセル(ransel, 高野長英は「担筐(中が甲)」

これらの実例から分かるように、原語の発音をそのまま移して使っていたことが分かる。これは明治以降の、あらゆる学術用語、日常用語が溢れ返った状況とは異なる。明治以降は、ドイツ語、英語等でも同様のことが見られたが、意味をより正しく広く伝えるために、翻訳する必要が生じてきた。

3 語彙翻訳され漢語化が進む

明治維新後の政府の政策は、欧化政策であり、それは殖産興業、富国強兵策であった。いわばドイツで宰相ビスマルク(Otto von Bismarck, 1815-98)が施行していた鉄血政策にも似通っていたが、その実、西洋化、近代化の試みであった。早く西洋の技術を受容し、産業化を進め、国力を充実し、西洋の帝国主義的植民地政策に屈しないようにしようとしたのである。

同時に、西洋における新しい学問が輸入された。物理学や化学はさておき、もっとも難解だったのが哲学かも知れない。明治時代は、語彙の意味や解釈に加えて、またその意義を実行するということも、大切であった。それらの語彙を肉化し骨化することが要求されていた。自家薬篭中のものとするためには、翻訳こそが最短の道程だった。(理解の過程であると言える。)

明治維新によって、近代化、西洋化を進めようとした日本にとって、西洋の思想、政治、経済用語は必須であった。たとえば次のような語句が漢語にして輸入された。

愛、衛生、定数(常数、恒数)

社会・存在・自然・権利・自由・憲法
個人・近代・美・恋愛・彼/彼女
芸術

たとえば芸術(art)という言葉を考えると、それ以前に使われていた技芸(arts)に思い当たる。つまり、ある時代まで、恐らくは 18 世紀の観念哲学が登場するまで、芸術は芸術ではなかった。それゆえ、芸術家(artist)は存在せず、職人(artisan)が存在し、それにはパトロン(patron, gallery owner, buyer)がついて、いわば技芸的生産が行われたのである。

とりわけ、芸術はヨーロッパでも比較的新しくできた言葉で、もともとは技芸を意味した。たとえば英国王立美術院と一般に訳されている[Royal Academy of Arts]も、考えてみると「王立技芸院」とすべきものかも知れない。

以下、少し明治期前後に翻訳された実例を日本語と原語で見てみよう。
[憲法](constitution)その後中国へ輸入されて、漢字もそのまま使われた。
[自由](freedom and liberty) 根元的自由と獲得した自由
[愛](love, Liebe, amour)

例えば、日本には仏教用語の「愛」はあった。しかし「恋」、「色恋」はあったが、いわゆる西洋的な意味での愛はなかった。

恋愛という言葉、日本語では比較的新しい言葉である。

二葉亭四迷は、当初その小説『浮雲』(明治 20 年―22 年, 1887-89)の中で、「ラヴ」と表記した。そしてその後、「愛」と書いた。二葉亭四迷は、翻訳中にふと出会った一節に苦渋して、ついに「死んでもいい」と訳した。その原文が[I love you.]である。漱石は、それを「月が奇麗ですね」と訳したとされる。

それゆえに、「君を愛している」と言う言葉は、今日でさえ日本人の心性になお馴染まない。類似の表現として「君が好きだ」程度までであろう。「君を憎く思う」などという逆転した心象の表現もある。

[衛生](hygiene, hygies)(ギリシャ語の健康な、という語に由来する)また健康の女神(Hygeia)、もともとドイツ語の[Pflegeheit]を長與専斎が訳したものとされる。

実際、彼の自伝『松香私志』にその記述が有る。

しかし、実際には中国語に衛生という語は存在した。この衛生と言葉は、明治のひとつの流行語になった。下町で姦しい庶民が、ひどくこの衛生という言葉を気に入って、盛んに使ったのである。
[定数]、定数は数学、常数は物理、しかしどちらも constant number である。
[社会]、society という語を、福沢諭吉が最初、「ソサエチー」と言っていたが、訳出した。それを最初、「仲間連中」と訳したが、それでは馴染まなかった。それでついに「社会」という語に定着したのである。

例えば、医学の分野に属する病名にも、翻訳の時代を反映した訳語が見られる。
[結核の病名] 労咳(phthisis)、肺癆(consumption)、肺病、結核(tuberculosis)
中国語からの借用。胸の病気。リンパ節結核(lymphatic tuberculosis, Scrofula, King's Evil)は、中国語から「瘰癧」。
実は英語でも、無数の表現があった。それは、病因がはっきりしなかったためであり、それゆえに症状がすべて病名になった。(decline, wasting disease, complaint in the chest, the white plague etc.)

医学に関しては、ドイツ医学が英国医学やフランスより優れていると解釈され、それが公的な見解となり、ドイツ医学輸入が決まった。ゲル(Geld)、メッチェン(Maedchen)、ゲレンデ(Gelende)、カルテ(Karte)、クランケ(Kranke)などがドイツ語から一般的に使用されるに至った。
ドイツ医学が修得されたために、ドイツ語が染み込んでいる場合もある。
カリエス(骨結核)(Karies, Caries)、英語の発音は、ケアリーズとなり、まったく異なった印象を聞く人に与える。

他の興味深い語として、次のようなものが挙げられるだろう。
[画学生]、[女学生]、[青年]、[懊悩]
これらの語は、多かれ少なかれ「天才」や「芸術」と無縁ではなかった。新しい時代に登場した新しい人物像を如実に反映していたのである。それは、流行というものにさえなった。ちょうど「衛生」という語が人々に広く愛唱されたように。

逆に、原語をそのままの発音で使うということも起こった。そして、それが流行にさえもなった。外国語を自在に使うということが、国賊という観念から、格好良いことと変ったのである。

例えば、ゲル、メッチェン、りーベ、等などのドイツ語からの直接移入された言葉は、とりわけ新しい時代の寵児となった高等学校と大学の学生によって使用された。それは、彼らが特権的な学校生活の中で学ばされた語学であったが、それを習得する過程で、いつの間にか自分たちだけの間で通じる言葉、合言葉、あるいは俗語、隠語として使用したのである。

同様の例は、フランス語にも見られる。画学生が、ベレー帽を被り、そしてフランス的な愛を語るという憧れが、庶民の間にさえ起こった。

「アムール」(amour)、「カフェ」(café)、「デッサン」(dessin)など馴染みの深い言葉が実はフランス語からの輸入なのである。

逆に、もっと長い歴史的過程を経て、現代に受け継がれ、日本にさえやってきた語があった。たとえばそれは、[ギリシャーアラブー中世ヨーロッパー現代]と流れ落ちてきた、化学の用語である。

「アルカリ」(alkari)、「アルコール」(alcohol)、「フラスコ」(flask)、「アシッド(酸)」(acid)

これらは、生活に、学問に生活に必要な単語であって、当然のごとくに受け継がれてきた。

こうした中で単語ではないが外国語の影響として傑作な例は、「亀屋」であろう。横浜にいくつも出現したこの店の名は、アメリカ人が自分の犬を呼ぶ時に[Come here!]と呼び掛けたことに由来する。犬の名前ではなく、単なるセンテンスの発音が、そのまま商店の商標になったのは興味深い。

必要性という観点から見ても、言語は重要な意味を持っている。たとえば、サウジアラビアには、雪という単語がない。それは、雪が降らないからである。
しかし、駱駝の身体の各部分に関する詳細な単語が存在する。日常生活の必要に迫られて、詳細な単語が駱駝の身体の部分部分に割り当てられたからである。

4 必要のため単語が作られる

すでに、雪と駱駝の例を引いた。

しかし、もっと日常的な問題としての食料を考えてみるとよい。

確かに、調味料としての「胡椒」(pepper)は重要である。「黒いダイアモンド」なのである。しかし、それを使って保存する肉も、もっと面白い展開を示していないだろうか。

動物とその肉の例を考えてみよう。

われわれが日常的に食する、牛肉、豚肉、魚肉などがある。しかし、論文末の付表でも示したように、少なくとも英語では動物に対して、それに対応する動物の肉が名詞として存在する。こうした単語は大抵がフランス語からの移入語で、実際英語に占めるフランス語の語彙が全体の40%であると知れば、首肯できるであろう。

しかし、もっと興味深いことは、この付表の左側の動物名は多くはゲルマン語からの輸入であり、一方、右側に列記された動物の肉名は、大部分がラテン語系なのである。この付表には敢えて取らなかった単語に「鶏」(cock/hen)とその肉としての「鶏肉」(chiken)がある。この後者の単語は、ラテン語系からの移入ではない。

しかし、日本人は基本的に動物の肉を食べることが少なかった。魚や野菜を主に食べてきたために、こうした豊富な肉の種類を分類する命名をしなかったのである。分類(classification)はあったが、命名(nomenclature)はなかった。動物は知っていたが、肉として食べることが社会的に容認されていなかったためである。それは、主に仏教が肉食を禁じていたためである。

動物(animal)	肉(meat)
仔牛(Calf)	Veal
(Ox/Cow)	Beef
(Pig/Hog/Boar)	Pork
Deer	Venison
Sheep	Mutton
Lamb	Lamb chop

しかし、そのことは日本人が太古以来、肉食をしなかったという証拠にはならない。肉食は常にあった。蛋白質の供給源としてこれほど便利なものはなかったであろうし、それはとりわけ山国でそうであったのであろう。

日本人が、肉食をしていたことはよく知られているし、それは牛や豚でない肉で残っている。桜(馬肉)、牡丹(猪肉)の二つがよく知れていて、つまり昔から肉はあり、また肉食もあったということが分かる。

5 ますます複雑な用語を訳す:品性

「愛」という言葉が、かつて仏教用語であって、人間相互の感情を表象する言葉でなかったことは興味深い。実際に日本人が「恋愛」なるものを認識したのは、明治 3-4 年(1870-71)に出た中村正直訳『西国立志編』以後ということになる。そして、二葉亭四迷によって、小説の世界で「ラヴ」と「恋」の違いを知ることになる。今、比較的新し

い言葉(造語)としての「恋愛」を、「情」・「色」・「恋」などの語感と比べてみるとどうだろうか。「恋愛」の方がより洗練されていて、洋風で、より高級、より新鮮、より重要な語感を得ることだろう。

そのことは、明治時代の方が、今日よりももっと強烈に感じられたはずである。しかし、同時に、新しく馴染まない言葉であるゆえに、その心理も徹頭徹尾理解できるまでにはなかなか至らなかったに違いない。そして、今日でさえなお「あなたを愛する」という表現は、完全な市民権を得た訳ではない。

福沢諭吉は明治 8 年(1875)の『文明論之概略』で[society]を「人間交際」と訳した。現在では、「社会」と訳す。その真意を会得し、それを日本語に訳すのには苦労があった。しかし、新しい社会が発展していくためには、まさにその「社会」という単語が必要だったのである。

夏目漱石も二葉亭四迷も外国語の素養があったが、その前に、漢語の素養があった。かれらの頭の中では、外国の知識や思想が、まず外国語で入り、続いてそれを漢語的表現に置き換えて理解を進め、そしてついに日本的文脈におくという手続きを取っていた可能性がある。

たとえば、中村正直訳『自由之理』の冒頭部分を見てみよう。これは経済学者、哲学者として有名なジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 1806-73)の『自由の理』(On Liberty, 1859)の翻訳である。原著の出版は 1859 年、翻訳書の出版は 1870-71 年(明治 3-4 年)だから、ほぼ同時代に訳されて日本に紹介されたと言える。(なお訳者の中村正直は(1832-1891)は、洋学者で号は敬宇、スマイルズの『西国立志編』の訳者としても知られる。)

その『自由之理』の序論を見てみよう。

「自由之理、序論

リベルテイ〔自由之理〕トイヘル語ハ、種々ニ用ユ。リベルテイ ヲフ ゼ ウーイル〔主意ノ自由〕(心志議論ノ自由トハ別ナリ)トイヘルモノハ、フーイ ロソフーイカル 子セスシテイ〔不得已〔ヤムヲエザル〕之理〕(理學家ニテ名ヅケタルモノナリ、コレ等ノ譯後人ノ改正ヲ待ツ。)トイヘル道理ト反對スルモ ノニシテ、此書ニ論ズルモノニ非ズ。此書ハ、シヴーイル リベルテイ〔人民の自由〕即チソーシアル リベルテイ〔人倫交際上ノ自由〕ノ理ヲ論ズ。即チ仲間 連中(即チ政府)ニテ各箇〔メイ／＼〕ノ人ノ上ニ施

シ行フベキ權勢ハ、何如〔イカ〕ナルモノトイフ本性ヲ講明シ、并ビニソノ權勢ノ限界ヲ講明スルモノナリ。」(『明治文化全集』第 5 巻、日本評論社、1927 年、)

この翻訳は、今日の我々でさえ面喰うような難解な文章である。それは、恐らく翻訳をした中村でさえ確かに意味が理解できていたとは言い難い。

この文脈の中で、たとえば[society]、[individual]、[liberty]、[nature]などの訳出に苦吟している様がありありと読み取れる。これらの語は柳父章が『翻訳語成立事情』(岩波新書、1982 年)で取り上げていて、まさに新時代を告げる重要な用語だったのである。

たとえば[liberty]は「自由」、[society]は「社会」、[individual]は「個人」、[nature]は「自然」というように訳出され、じょじょに社会の中でその訳語が定着してくる。しかし、訳語が定着したからと言って、これらの語があらわす意味・概念が、そのまま理解されるようになったとは言えない。また訳語にも揺れがあった。その結果、一つの文章で[social]を「人倫交際」と訳し、[society]を「仲間連中」と訳して、同一の語から派生した訳語とは到底見破れない。明治初期に厳然と現れた大翻訳時代の後に、やっと原語と訳語の一対一対応を追求する時代、つまり訳語の一貫性が求められる時代が到来したのである。

こうした語は他にも少なくない。概念が存在せず、それゆえにぴったりの訳語が存在しえない状態で、苦渋の選択は続くことになる。ある観念やそれに対する用語が今まで存在しなかったのは別に悪いことでもなんでもないが、ある外国語の単語に対応する、あるいは相当する単語が存在しないことは、文化的落差を意味する。人間の哲学や機微をつくような用語があれば、それに思い至らなかった文化は劣等な文化、あるいは漱石の言うところの「半開」の状態であることになる。「半開」とは、西欧諸国が「文化開明」しているのなら、日本は「野蛮」の国ではないにしても、なお「半開」なのであった。

日本語にも中国語にも元来なかった語で、後に重要な道徳的意味を持つ言葉に「品性」という熟語がある。これは明治時代初めに到来した英語の[character] であり、道徳の程度、道徳性、の意味に対して、「品行」、「品格」などの訳語が充てられ、さらにそこから発展して「品性」という言葉が生み出した。

明治 7 年(1874)、ウエーランド著・阿部泰蔵訳『修身論』(文部省刊行, Francis Wayland, *The Elements of Moral Science*, 1835)の中で「品性」が翻訳語として初めて使われている。今ひとつは、日本教育学に多大な影響のあったドイツの教育学者ヘルバルト(Johann Friedrich Herbart, 1776-1841)の影響であろう。ヘルバルトは教育の目的を「強固なる道徳的品性の形成」としており、彼の教育学の解説書が明治 20 年代に大学の哲学科や師範学校で盛んに教科書として使われ、「品性」という言葉が哲学界や教育学界で急速に広まった。

しかし、ここで「修身」と訳出されている語も、元々は[moral science]であり、慶応義塾福沢諭吉、小幡篤次郎らが訳出したものとされる。福沢の「緒言」にこう記されている。訳語が成立する様子をまざまざと我々に見せてくれる。

「明治元年の事と覺ゆ或日小幡篤次郎氏が散歩の途中、書物屋の店頭に一册の古本を得たりとて塾に持歸りて之を見れば米國出版ウェーランド編纂のモラルサイヤンスと題したる原書にして表題は道徳論に相違なし同志打寄り先づ其目録に從て書中の此處彼處を二三枚づゝ熟讀するに如何にも徳義一偏を論じたるものにして甚だ面白し斯る出版書が米國にあると云へば一日も捨置き難し早速購求せんとて横濱の洋書店丸屋に託して同本六十部ばかりを取寄せモラルサイヤンスの譯字に就ても様々討議し遂に之を修身論と譯して直に塾の教場に用ひたり」

ヘルバルト教育学に影響されたのが、スマイルズ(Samuel Smiles, 1812-1904)の翻訳書である。明治初期、中村正直訳『西国立志編』(Self-Help)において character は「品行」と訳されたが、明治中期以降、別の訳者によって「品性」と訳し直された。スマイルズの著書は一般向けの教養書、いわば立身出世のバイブルとでもいうべき書物だったので広く読まれ、「品性」という訳語も広く普及していったのである。

やがて「品性」という訳語は明治中期以降、教育学界に普及し、さらに倫理学界にも広がっていった。明治中期に早稲田大学の大西祝(操山、1864-1900)は「丁酉倫理会」を主宰し、積極的に「品性」という概念を倫理学に導入した。また明治後期には東京帝国大学の吉田静致(1872-1945)は倫理学を「行為及び品性の科学」と定義したうえで倫理学の教科書『西洋倫理学史講義』(1905)、『倫理学上より観たる日本精神』(1934)を著したりして、「品性」について論争を展開したりした。

これに呼応するかのように、明治後期に出版された国語辞典や哲学辞典類で、［character］ の訳語に「品性」が定着して使われるようになった。当時の作家国木田独歩や夏目漱石の作品の中にも、「品性」という言葉が見られる。また、財界人・政治家としても活躍した武藤山治（1867-1934）は、「品性」を磨くように、社長を務めた鐘紡や時事新報社の社員だけでなく、衆議院議員として青年一般に広く呼びかけて言論活動を展開している。

このように、「品性」は訳出されてから百年以上の歴史をもって使われている。しかし、心理学の発展により、やがて［character］ は道徳的意味ではなく、中立的な人の人格・性格・特性の意味を示す用語として使用され始める。

6 訳語としての「人格」と「情報」

一方、明治中期に倫理学界で、「品性」と並んで「人格」という言葉が、欧米語［person］の翻訳語として登場する。こうして訳語「人格」は哲学、倫理学、教育学、宗教界と徐々に広がっていき、ついに大正時代には阿部次郎（1883-1959）の『人格主義』（1922）がブームになった。こうして「人格」は一般社会にも広く普及していった。この結果、人間の倫理道徳を表す言葉として、「品性」と「人格」という二つの用語が同時並行的に使用されていくこととなり、他に、「品位」、「品行」、「品格」、「徳性」などの言葉も造られ使用されるに至った。

特徴的なのは、文部省の文書でこの訳語「品性」という言葉が使われた事例が極めて少ないことである。

文部省は成立当初、欧米文化を積極的に導入しようとしていた。学校で修身の教科書として欧米の翻訳本を使っていた。しかし、極度の欧米化は風俗を乱し、日本の伝統的文化を頽廃させるとした伝統派・守旧派・儒教派の人々が欧米化・近代化にブレーキをかけ、欧米の翻訳本に代わって、『孔子』、『孟子』、『論語』といった和漢書を元に編集した修身教科書を使用を主張し、そうさせるようになった。そうした混乱した状況下では、修身の教育方針や方法を解説する文書では、「品性」ではなく従来からよく知られていた「品行」、「品格」、さらには「徳性」といった言葉が強調されたのは当然であった。

第二次世界大戦後、「品性」はあまり使われなくなった。戦前の「教育勅語」に代わって成立した「教育基本法」第一条の教育の目的を述べるのに、「品性」ではなく「人格」の完成をめざす、とされることに象徴されている。日本社会全体でも「人格」という用語が一般的となり、「品性」という言葉が社会的力を失ったことは事実だろう。それ

ゆえ、「品性」という言葉を用いて、道徳を説いたり、倫理的問題を解釈しようとしても、なかなか馴染まなくなっている。

言葉は生き物で、時代の変遷とともに変化していく。より人口に膾炙した言葉が、より多くの人に使用される。使われればさらに認知度が高まり、やがてその社会に定着する。その意味で、明治初年に、外国の思想が、多くの書物と共に日本に到来した時、用語ひとつひとつが文化衝突であり、また文化翻訳、文化移譲であった。

一方、眼を現在の日本に向けると、今日ほど「情報」という語が多用されている時代はないことに驚かされる。しかしながら、この「情報」という語がいつごろから、どのような形で、誰によって最初に使われだしたのか、必ずしも明白ではなかった。

元来、「情報」という語は中国でも主に軍用語として使われてきたが、中国人自身が近代日本から来た用語の中国語として認めている。それゆえ、

（１） 漢語ではなくて和語とみなすことができる。

（２）『明治のことば辞典』では、「情報」という語が現われるのは明治三十八年以降で、「情報」は明治になってから現われた語ではないかと考えられる。残念ながら英語のように『オックスフォード英語辞典』[OED: Oxford English Dictionary]のような浩瀚で、用語の初出が確かめられ様な辞書がないので、諸説を探るしかない。

これまでの通説では、文豪である鴎外森林太郎 1862-1922)が最初に用いたとする、鴎外造語説が有力であった。しかし、明治期の「情報」の用例を調べていくと、兵語に由来するとの学説があり、兵書を重点的に調べた結果、鴎外が文筆活動を始める以前の明治九年に、既に「情報」という語が使われていることが分かっている。また明治十年代後半には、「情報」だけでなく、「状報」も並行して用いられていた。

(明治十五年三月二十日の睦達乙第十八号により陸軍省が制定した『野外演習軌典第一版』では、情報という語が多数用いられている。公式文書に情報という語が現れるのはおそらくこれが最初であろう。この野外演習軌典は、明治九年に陸軍少佐酒井忠恕がフランスの実地演習軌典を訳出した『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』(3)を土台にしており、この訳本ではすでに情報という語が使われている。これ以前に出版されている兵書を調べてみても惰報という語が見あたらないことから。おそらくこの本が情報という語が使われた最初の出版物ではないかと考えられる。情報は「情状の報告、または報知』を短縮したものと解釈することができる。野戦では斥候、偵察、間諜などを派遣して地勢や敵情を調べる。その報知を酒井は情報と訳した。その原語についてはまだ原本を確認していないが、つぎに述べる理由からフランス語の renseignement と考えられる。(1)フランス語を主体として編集されてい

る『五國対照兵語字書』には information が採録されていない。(2)明治十八年に訳出された『佛國陣中軌典』では、情報に『ランセーギュマン」または『ランセギウマン」の添え書きがしてある。(3)一八九五年の『仏国陣中軌典携帯版』の原本では renseignement が対応している。(4)後述する『佛和辞典』の enseignement の項に状報が記載されている。小野厚夫「明治期における情報と状報」情報処理学会、1991 年 2 月 25 日』』

［参考文献］

小野　厚夫「明治九年、「情報」は産声　―フランス兵書の翻訳に語源―」1990 年 9 月 15 日「日本経済新聞」朝刊　文化欄

丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』岩波書店、1998年。

柳父章『翻訳語成立事情』岩波書店、1982年。

吉沢典男・石綿敏雄『外来語の語源』角川書店、1979年。

表2:明治初年度の翻訳点数

年度	総点数	翻訳書点数	翻訳書純点数
1868 年	290	25	19
1869 年	279	37	32
1870 年	275	35	22
1871 年	356	76	53
1872 年	410	108	84
1873 年	668	132	106
1874 年	757	155	116
1875 年	781	168	130
1876 年	780	172	124
1877 年	793	155	114
1878 年	789	182	128
1879 年	818	188	159
1880 年	805	117	88
1881 年	934	138	89
1882 年	978	181	146
合計	9713	1869	1410

注：Webcat Plus（http://webcatplus.nii.ac.jp/）より作成